新局玉石童子訓

巻十八

逆13
1279
03

へ13
1279
33

村田

新局玉石童子訓 巻之十八

東都 曲亭主人口授編次

第四十八回

偽兵を率て健宗好純を襲ふ
醉夢を驚して良臣玉石を辨ず

前回にまゝ罄さでりける。七鹿山の殷末を復説大江杜四郎成勝。峯張楽六郎通能い二度の窮阨を相脱れて長橋倭太郎勢恭。象船弟弥知重。
等と俱ふ土地善神を黙禱る果て退いて談ずるやう。我们是より越路ふ走らば再度の追隊逼来て難儀ふ及ぶ事やあらん。早く路を取替て。
美濃尾張の方ふ向かば必後安かるべし。と呼く成勝と共伴ふ通能ふ
いふやう。曩ふ這山脚の茶博士の。不問自語ふ知りぬ。この山より美濃へ
出る。捷徑のあるゝぞや。和君等それを知りたる歟。と問まて勢恭知量い応

難く沈吟して否。我れも這山を前より過りしことなければ其儀は
知らぬ。這里欲那里欲とさだりに思難くありける程に奇なる哉両箇の大鹿
土地の茅社の頭より。忽然と出て来り敢て人を怕ぬ。這に年若の先に立て
徐々として行るやぬ。屢後方を見返りて我を導く者に似れば成勝通
く意表に悟りて自餘の三人に咤くやう。彼は正しく神鹿なり今我れ〻の為に
しも御導を做さるべし。嚮の谷雲の奇異ありて恁云勢桑知量の必死を救ひ
然と然るべし。彼鹿あるん疑ぬして従ひやすべ便宜を得ることやとて。倶に鹿の
ゆくに任せれば鹿は成勝通能勢桑知量共侶に欲び見て。寔に
町。左に曲げ細路あり。鹿は路を左に取て。その細路に入りしかば成勝通能勢
桑知量茲なりけり。と皆あろうして。開ぎ儘従ひゆく程に實に是鳥路熊径

樹木森然と枝を交えて。瓢形の日光に疎く。荊棘離々と伏累りて。
人の脚を捉らまくに實に是一歩運ぶも安からぬ。然れば已に死に
倶に辛くして従ひゆく程に終日して饑渇を覚ぬ。是日申牌過る左側に果
して一村落に来りけり。當下件の両箇の鹿は。その程に欲在らぬとありて。敢
亦見ることなけ是べ叔はとだりに小年若は。神の祐を感して。倶に踵を旋
らして故来し路を再拝して。姑且して長橋勢桑は象舩知量に向ひていふ
やう。鹿の里近く山に在る者は秋田圃を損ふ故に人射て捉るは利益あり或は
又獵者の野とものいぬぬ山とものいぬぬ猪まと鹿まれ射て殺て。開ぎ勢桑は殺
生なれども。生活なるべ乎何はせん。單その人なるべ者一時の興を取らんとて。
人の為に憂を做さる。禽獸を射て捉るは寔に無益の殺生なり。初已日
その義を思へぬ。紈袴の暇ある折は單郊外に獵猟して鹿を射て多の

樂に倣したるにもあるものを今日ハ料らず神鹿に必死の厄を救ひてこの
浩路さへ救らるゝ事々我们が果報にあらずや大江峯張両賢兒の人に勝れ
し忠信孝義の餘慶なる事疑ひなし。倶に後悔なかりける。作者曰
三板巻の六の十二の端像に長橋象船両少年が鹿を刺まくせる図なり。その段勢桑知
量が後悔の心操を早く写し出さし。のちの神鹿にハあらず看官その用意を思ふべし
浩處に一箇の荘客前面より来にけれバ通能急に呼留めてこの里の名を問ふに荘
客答て這里ハ昔より世にきこえし美濃と近江の境なる宿物語の里なりと
いひ捨て走去けり。是により成勝等ハ這村梢盡處に最寂なる客店に宿
を需るに勢桑と知量ハ程遠からぬ御士の子兒の漫に出て憶ざも撥消し
なりといひ倣しゝ又成勝通能ハ彼等と相識旅客にて憶ざも前程行
逢しと説瞞しかバ一路人の相応しからぬも逆旅主人等ハ疑ハず然バ四箇の
少年ハこの寂寞たる宿をかりて外に合宿の旅客なけれバ絶にこゝろを安

くまで倶に湯浴し夕膳を果まて程に長き四月の天なれども既にして日も
暮けり當下成勝通能ハ孤燈の下に坐を占て治比と住吉へ贈るべき紹
介の書翰をものして倶に勤肚の財嚢より圓金各五両を出して件の書
翰共侶に是を勢桑知量に與へていふやう和殿等周防へ赴くに盤纏なくハ
あるべからずまた此ハ少にハあれど路の資にせよかしといふを勢桑知量ハ些も辭ハず
推戻して开を思ひかけもなき我们も亦懐に些の貯禄なきにあらず。僞に
君命といひながら難義の討手を兼て倶に宿所を出る時倘風念の隙に
なりて帰城すがくもなきべく金銀こそ第一のたのもし人なるべけれと豫思ひ
しよしもあれバ有ん涯りを掻攫ひて懐にしつる是見なさいといひつゝも倶に
懐を掻揚て拿出して見せる金此彼等しく十餘両あり成勝通能是
を見て這少年等の遠慮あるを一霎時感歎しけり。开が中に成勝ハ又

勢恭を向ひていふやう。和殿を遠く思ふありて。近く憂を資るまでに各盤纏に足とゝまる。周防にめいて逗留の程。財用竭るべ不便うん。我々は父兄の恩惠によりて二三稔の盤纏あり。薄義なれどもあの十金を枉て納めゝとゝふその言の切なるに通能も云ふと連りに薦めて已ざれば。勢恭と知量は困じて俱に辭ふに由なく。其五金を受納めて残る五金をかへていふやう。芳意默止がたければ教に従ひなる。這五金にて物足まり。高恩徳我は千萬言もて謝すとも盡しがたし。餘財は納めゝとも亦受べくもあらぎ。されば成勝と通能は強難て麦辯せど各金子を合納めて猶も餘談に及ぶ程に勢恭と知量は當國美濃より尾張に出て。伊勢路を過りて捷徑を索めて住吉に迫んとゝふ亦成勝と通能は是より岐阻路に杖を薦めて東國に遊歴さべしとて。遂に去向を定め果て俱に枕に就けど。然しも餘波の惜まれて。睡らんとすれども勢恭と知量は捨て命を又さる神の祐に甦されても。猶端なる世を不樂て已ず往方を思ふも。親に等高嶋の高恩を空ふして倘連累の罪ゆゝも。認らず哀れん欲と思ふ心をゝのべそふのられば胸の苦ゝ。鬱に劇き戰ひの撲傷ゆやありらん。勢恭も知量も腕痛て堪がたければ。俱に師傅の仙丹を唾に解て塗まる其疼痛拭ふごとく。立地に愈てけり。識る哉高嶋祖傳の仙丹は同藩の朋輩にすらも敢て々〳〵是を授けぎ。その故にその効藥をゆの知る者ぞ稀なるに勢恭は石見の国の産なるをゝのべさて知量は弟子にて其心操衆に勝て老實なる故に好純早くその両少年に彼仙丹を授けすりをもて知量は鬱に小指を噬斫ゝ時血さへ痛を覺ざるゝ。彼仙丹の即効ぞあるけり。間話休題然る程に成勝通能勢恭知量は夏の天早く明る時候

遠く起出て朝飯を果す程に勢恭と知量は被龍の襁褓甲を脛巾を脱袴て行囊に詰まく欲するに幸に成勝通能の袱に餘りあり。かごを借て色のごとき其の他雨衣脚衣菅笠路次の買物とて各准備整ひ。かご通能則勢恭と共伴に逆旅主人を召よせて房錢を還す程に宿の炊婢ども来ぬる。晝の儲の裏飯を各々に受合りて袱に立出て草鞋穿締うち連立てゆくこの間遠く尾張に赴く岐路あり。建て傍示に分明なるべ。皆共伴に歩を駐めて送に再會を契るのを世に定るは雲水の西と東へ別の口誼も言語寡く惟々恋憐る袂を茲に分ちけり。安下某生重説彼日觀音寺の城内なる。高嶋石見は好純の西郭の宿所に今朝来る大江拳張両主僕の越路へと辭去り一時石見は他ぐらに為に去歳の秋より預り置なる。君侯恩賜の両種なる。沙金白布の韓櫃を両個の奴隷に舁せて。早く

本館に出仕せ。曾根見五郎平宗玄に對面せまく欲する宗玄は恙ありて。出仕せずと答へ。かば只得自餘の近習を請ふて則告禀さらく。守の豫知召されし。臣が宿所に寓居の旅客大江杜四郎成勝拳張米六郎通能に今朝来る越路へ赴くとて俱に立去りぬ。就て去歳の秋九月十五日に。彼等恩賜の三種に最添く受まるものゝ旅に赴かざり。異日かゝり参るまでと貽置ぬ。然れども彼等再来ぬる。多く歳月を経ぬべうんその折まで彼三種を寶庫に藏め措まく欲を。所以に持参仕りぬ。その弐を空上にて躰奥へぞ赴くける。余る程に石見は尚その席に居り二度び近習の出て来ぬるを。侯と約莫半晌許ありて。件の近習は單奥より出て来り。石見に向ひていふやう。和殿の稟されし。夏の赴を則守に伝へ上しに守の御氣色宜し

かゝるぞ且宜しからう。彼大江杜四郎。峰張柒六郎のるゐ者。我始より。石見
次ゐ命ぜらく。彼等他郷へ立去をり。其前日ゐ告よとのゐ志を石見次へ何と宣
たるやん立去りて後ゐ告るゐ抑亦等閑ゐ成ぬ況去歳の秋彼少年等ゐ賜
御物を。自由ゐ儘ゝ貯置べ。他等ゐ當城内ゐ在りゝ時。ゆゑ上て御上日を。伺
奉るゐ該るゐ。ふそも亦他等ゐ去りゝ後押てかゝ納まく。其不敬甚ゝ。裕
と云恰とのひ石見次の臆念おろゐがて。早く宿所ゐ退て後の御沙汰を俟べ
ゐ者也。又彼杜四郎柒六ゐ我賜ものを用ゐゝと。貯置たらんゆゑ今所孰ゐ與ふ
べゐ。近習等目録ゐ合ゝ受取て遺るく有司ゐ遞與べゝと仰らるゝひゐ。と告るを
石見次謹ミ兼て旦答稟ゐ。御諚畏ゐも兼りゐゐぬ。但杜四郎柒六ゐ。今朝
發足の一條ハ昨日曾根見五郎平ゐ云云と報ゝかゝ既御咎ゐ入りらん。と
思ひゝゐ似ぞ等閑のゐん咎を兼まりて殆迷惑仕りぬ又杜四郎柒六ゐ彼

御物を貯ゝ置んと。臣等ゐ意表を告げのひゐ僅ゐ昨宵のゐ内なれば。
稟上るゐ遑ゐ。目今ゐ暫べゝ聊ゐ等閑ゐ。遲の罪を忘ゝるゐ。ふそも。
然ゝ云ゝとゝ身の失を飾りて陳じ稟ゐゐ。ふ。
倘又御沙汰あんをり。術よく稟ゝのゐれかゝ。とのひ果ゝ身を起ゝ。
舁ゝ来れる韓櫃を。件の席ゐ舁ゐ。目録と共侶ゐ彼沙金白布を一箇
一箇ゐ出ゐ程ゐ自餘の近習も出て来つ好純ゐ會釋ゝて始の近習を帮助
ゐて。東西皆受取果ゝかゝ石見次ハ両箇の奴隷ゐ空櫃をのゝ舁せて。躯
宿所ゐかゝり来て妻の長江ゐ云云と君所の首尾を咀ゐ示ゝ。長江ハ頷ゐ瘧
ゝつ後の西沙汰ハ左やあんゝ右やあんゝと思ふのゝ慰難て立まく。ゐる。好純急
ゐ喚禁めて本月ハ吉ゝ。ゐる我母大人の祥月ゐて今日ハ忌辰ゐ丁りのゝ墓參り
をゝるゐ思ひゐるゐ障りゐ。来て守の西氣色宜かゝねゝ。漫ゐ外へ出かゝり。渾家代

りて参詣せよ。そも猶外目厭へ。いまこの轎子ともよかれ。伴ひ来る老僕を遣さん。
疾々とのたまへば。長江の異説なり。退出て身装さへ時を移さぬ。衣裳を整へ終る
程に既に亭午なり。かの主僕遽しく晝餐を果して後門より出でゆく。長
江の伴当なる老僕某甲と綽名する一絵固の腰下婢而已。両個の奴隷に轎子を舁せ
て香華院へぞ行けり。余程に高嶋の宿所なる主の女房を始めて男女多く生盡
して。留守なる一両個なる婢妾等のみ残りて。石見次郎徒然に堪ざる。鄙なる思ひ
もあり。守の御不審を兼ねまりしかそ。曽根見宗玄の詭なる欲と猜して。言ふ
ざさ。弦べ胆向ふ心懼々と樂まざる風暖かに四月の天日。秋欲とぞ思ふ。身の憂患を
遣難て只獨坐居。若葉に暗く夏樹拉。庭の筧の音絶て。盆池に浮む紅鯉を。人
に押て入人をも。怕れ者をいらるれば。君臣朋友心隔世の乱をあぞ如意なる。孤と獨
語て訪ふ人ぞなき。長沿銷し。今日ぞ常より長しと思ひ暮る是。日晡時なり

ふ慌しく来る者あり。と見れば是別人なり。今朝未明に呱呼て大江峯張主僕の為
ふ跟繋に伴せよとぞ。越路の方へ遣しなる若黨勾津字六と奴隷可平ぞありける。人に
打擲せられ欲頭髪乱れ衣を破れて面色も示平なる。倶に惚なる聲音ぞ。悄
地に報恵ぞ。一大事なりとぞ。石見次郎驚ぎ。先四下を見かへりて。
且その所にを諸れば。字六のいふやう。鄙なる大爺の仰のまに〳〵小人等を大江
峯張両客人に倶して七鹿山を踰るをと思ひかけず。小人等は曽根見主に
生拘れ顔の方に牽きしより。説盡されぬ禍鬼起りて。事大変に及びぬる。首
をぞ箇様〳〵尾ハ示如此々々とて。長橋侍太郎勢茶と象船等弥知
里が君命により彼山に大江峯張両主僕を刺て捕るべきを射まく欲せず。悄
地に機密を告る折ふし。又彼曽根見宗玄が隊兵多く従へて。山路迫に登り
来て既に闕窺しより。長橋象船両少年も逆心ありと罵りて。隊勢を進め

捕綱て搦捕まくもてけるに四箇の小手怒れる堪ぞ勇勢を敵ふ戰ふ程ふ曽根見い兵勢始ふ以ぢ長橋倭太郎勢兼ふ窮所を射られて命を喪ひ隊の雜兵も散々ふ死活も知らぞうーるる。小後長橋象船い意表を遺うく說盡て君の仰ふ違ふとらぐ。罪ふ沉両才子を殺さぐ只是守の御怒を補ひまつる為ふ宗玄ぐ奸虐ふ。遍て茲ふ及ぐ上い宿念竟ふ画餅ふなりて今さる妙ふ家ふ立去るふ路もなーー。是ぞぞるりぞ。長橋象船共倍ふ千仞の谷へ身を投て嚴も沉見えぞるりー。夏その折大江峯張のいひるるの顛末ぞ心可平ぞ共倍ふ其漏れるを補ひて相報る者半晌許言果て字六ぞ彼折勢兼知量ぐ死後の照据ふとて渡ーたる。彼髪の毛と小指の端を懐より撥拂ぞて。开ぐ儘主ふぞまるーぞける。却ふの段の條々へ。近く前回ふ見え元ぐ看官兼知のるるれども。今示さるふ其崖畧を敢のい

ざるとを沉ぞ。是ぞを作者の鶏助筆とやらぞ。間話休題當下石見炊好紙い今字六可平ぞ。報るを遺うくぞ果て愀然ぞて嗟歎ふ堪ぞ。又沉るるを解沉ぞ先勢兼の髪の毛と知量の小指の端を見ぐ傍ふ閣沉て思ひ沉や。倭太郎兼弥い忠義の宿意を果ーぞ沉ぞを溪水ふ淪んとふ宗玄既ふ撃れぞりとぞ。その隊兵ぞの免れかりて告訴ぞる者さぞあーん。曽根見い當家の嬖臣ふて且弟伍六郎健宗あり。それゆ優る窓井の方あり。我今他ぞふ先だちて大江峯張の生處来歴并ふ倭太郎兼弥ぞの心烈自殺の趣沉を蚤く訴禀さぞい。彼ぞるぐ為ふ誣られて我さ守の巳疑ひを兼まるる事ふあらんと思べぐるりぞ。鬱ふい思ひかけるるぐ。守の御不審ふより籠居て後の巳沙汰を俟折るれべ叨ふ御館へ参りがぐり。老臣多賀政朝主と一口鬼太夫い倶ふ忠義の本性ふて我と心知りるれば蚤くふの義を

石見次好純
單身
衆兵を防ぐ
鬼太夫
偽兵
偽兵

石見次
偽兵
偽兵
偽兵

告知らせを彼帮助を借るあるべき後悔其首を達かざらん字六を我為ふ。
多賀主人走りあるを七鹿山の顛末を見聞し如く悄地ふ告よ又可平ハ一口へ
使して其の所字六と同じかるべ。そくと臂近る。料紙硯を曳せそく。墨
磨流を走書筆の秋毛も牡鹿の角の東の間ふして密書三通を写し果
ぬく甲乙共ふ分ち封じて書筒両箇へ藏めて卒とを取らそれば字六と可平ハ応
を考つ膝を找めて各件の書筒を受取りつ遽しく外面投て生ふけ。介程
ふ石見次ハ心の憂遣るかこもるを勢恭智量両義烈の彼死を惜むふ餘り
ある大江峯張両主僕の往方甚麽と想像る四月の天の薄曇り越かさ
遠を牡鵠幽ふ渡る聲ゆけば不如歸と鳴と欲ひと妻の長江ハ生憎ふ。ご
香華院よりかつて来ぬ俟とるつふ日々落て黄昏近くるつ一時候。
人や来つらん玄関の方ふ呼門聲をるつ石見次是をいて折ふく老僕若

黨奴隷まで皆出盡して客を迎る人あるぞ然れども婢女毎を。執接ふ牛
かごとり。我のごとくで誰ふある。と單語つ応を考つ。婦屏風ふ掛さりける裾を穿
つ遽しく。中刀を腰ふして走出て玄関ふ障子を斜辣哩と曳開れば思ひかけ
ぬを紐捕の雑兵御説ぎと呼ひて左右齊一組んと找むを石見次ハ甚
麽。と驚ぬるぐるを洲して脚を翼ふ右ひざり一丈餘り投退れば續て競
ふ衆兵を右ふ左ふ受駐て息を。難きぞ投伏ぬ怒ふ堪ざる聲高やるふ。
若ぬハ是何人ぞ事の仔細を告る知らぬ侍品たる者ふ索を被る法や
ある猶狼藉ふ及びるべ开ぐ儘ふして還さんや。と敦圉猛く疾視るる。武
術修練の本事ふ懲けん紐捕の雑兵十名ばかり。只冒々と嘯くるを重て
蒐る者も。当下門外ふ留在る蓋一箇の少年あり。年の齢ハ十八九ふ
て眼圓ふ栗の皮めく面ふ似げるを額髪ハ角欠とぞ思ふ黄牛の行勝る

らん野袴の下短うる戦外套苛物作の両刀ハ問でもあるを緝捕の頭人曽根見五郎平宗玄の弟と人ハ知られる伍六健宗茲ハあり。と名告る果ど找を入るるまハ九尺柄の釣鎗を挾み眺へて。をれ好純無禮うるを。若ど家ハ寓居の旅客大江杜四郎峯張梁六ハ素是敵の間者ゆゑ越路へかゝるとゆゑ一ハ我君他名の討ゆゑ若ど侄うる長橋勢恭と弟子象舩知量ハ仰付られ。うけるハ勢恭ハ知量ハ友て敵ハ内応して七鹿山の樹下うる外觀稀うる地方ゆゑ杜四郎梁六ハ密談ハ及ぶを。我兄宗玄其機を猜して。悄地ハ守ハ請まり。隊兵多く従へて。迹を跟つ彼山ゆゑ搦捕まく欲ス。ハ我兄ハ幸ゆくて惜や敵の流前ハ命空くあり。より。より。より。隊兵毎ハ頭うる蛇知らまて。我身遊倅るものゝ。兄の怨を復え為ハ再度の討ゆを請ま

ばて。隊兵さハ借一のゝ。四箇の逆徒を追撃ゆゑ。今其事の創業ハ若日同じ不義友迹又我為ハ宋家の半隻一家の奴们一箇も漏ざ慶ハ。せん為ハ。ら向ひを知らざるや。項を伸ゆゑ誅戮の刃を受よとのゝゆゑ果ゑ。好純呵々と冷笑ひて言。鳥滸ゆゑ討ゆ呼ゝ。彼大江峯張ハ。ゆゑ来歴分明ハて。當初浪華ハ名る。ゆゑ峯張通世の児孫うるを。當家の故老ハ知るるもあらん。又倭太郎美弥等ハ俱ハ忠義の士性ゆゑ罪うるゆゑ主僕を殺ゆゑハ忍ひ。ゆゑ。悄地ハ守の御怨を補まく欲ス。ハ若ど兄宗玄ハ善ハ禍ハ悪を恐ハ。せる。奸虐非道の癖あれば雑兵さハ駈催て彼山ハ逼り来て。友て命を失ひしハ。自業自得ハあらざるや。然れども倭太郎美弥等ハ守の仰ハ依らぬ。して宗玄。并ハその隊兵さ輙ち。泉ハ。りけるを。ゆゑ。責て一要時もあらば。俱ハ千仞の谷底へ身を投捨て亡ぶと。注進の者あり。て。ゆゑ。蚤く這里へいゆゑ。それのゆゑ。

いつわりぞや。當家ゐ人の弓ゐ引くゐ健宗若い遊伴めてまご仕へざる者ゐ～あるゐ。兄宗玄ゐ習へる欤雑兵さえ呼誘ひ来て當家の故老を撃まくも罪反逆ゐ異ゐ～ぞ倘速ゐ退かぬ。搦捕て御館へ牽ん後悔をぞと罵れば健宗怒て左右を見かえり兵毎那奴ゐ腮唇せず搦捕ぞゐ組伏ぞゐと聲苛立て働まぜども雑兵等い好純の婿の本事ゐ鬼胎を抱いて応ぞるのゑ遊逡て又我も者あるおとろけ見べ健宗焦燥て持さ鎗の鞘を左辣哩と振落して日光の如～ゐ石見火を刺んと連りゐ術を盡せども好純敢物とも せず右ゐ左ゐ遣違ゑ。鎗の蛭巻丁と含る。修練神速無襲の剽軽健宗い奪ら且下と力を涯ゐ曳く程ゐ石見火いかゐ見せぞ鎗の鋒頭を抜含りて後方遥ゐ投捨れば健宗慌て。とその柄を棄て抛蒐るを好純喋ぐぞ左ゐ受て宛拘児を滾ぞ似く。項髪含て採仆ぞを起んと蠢く程～もあ～ぞ登蒐り組布て生捕まく

欲ぞとども。不用意ゐして捕縄ゐけ連りゐ聲を震立て婢女毎い奥ゐ在る母上疾索をもて来ぞゑと叫べ示健宗も最苦～げる聲立て～兵毎我を救ぞゑ見てをること欤と怒れば雑兵等いゐの一句ゐ。恥を知る者両三名応と答て走蒐りて推仆元を麗くを好純些も動ぞゐ。ゐけぞ猶健宗を膝の下ゐ組布ゐ～左右のゐを挿き～雑兵を或い中射翼ゐ投いゐ～白打の術を盡せば又我む者ゐ～ゐ。組布れゐ健宗い恥甘ぞを引てけ上ば腰ゐ短刀抜て好純の太股を刃尖深く禹然と刺ぞ好純痛痍ゐ撓れども。身單ゐして多かる敵ゐ勝を取ることかさければ只得中刀抜閃めりて亦復近ぞ雑兵を殺拂ひ打散して。かゐを刃を健宗の右の腕ゐ衝立れば健宗い呀と叫びて反返ぞ。脊力もゐ～。貴子を かりて縫れゐけん流ると鮮血共侶ゐ握持す短刀の柄を放ちて弱り～を雑

兵等は猶救んとて競ひ蒐れる程なるもあり突然として外面より走り来る一箇の武士あり後方に續く伴當等が黄昏過ぎるを挑灯十を挿縄持るもありて主従都て十餘名高嶋の宿所なる玄関陸〻と綢入りけり開き中に件の武士は持る十を振て健宗の隊の雑兵を撞懲しつゝ聲高やかに若等は是野武士組なり游兵はあゝぶる欣先度に懲ぜ健宗は呼誘されしや狼籍非法今は為る饒しかぢり這乱虐を鎮んが為に一口鬼太夫安陪が〻ぶらゝ来たるを知らざるやと名告に驚く雑兵等は吐嗟とぢり身を縮まして一團ゆぞりあひける其間に石見丸は健宗の腕に衝立さる刃を抜ぜ柄に携りて身を起しつゝ徐やかに三尺の程退けつゝ痛痍を敢物ともせず鬼太夫はうち向ひて折らるゝ安倍主爾に家僕可平をもて告げる一義を問まして欲と問へば鬼太夫然ばとて七鹿山の凶変は曽根見五郎平

に従ふて彼山に赴くなる野武士の游兵等が〻り来て許禀をゆよりて知るりのゝ彼をり長橋倭太郎と象船弄弥の自殺のゝ〻まぐ〻の日ゆゑぞありけるに和殿も亦逸早く使札を以て告げられ事の實を知てければ先ず賀殿に面談して非如夜を犯せと曰館へ帰て上てんと思ふ折ゝ人あり曽根見伍六健宗が兄の怨を復さんとて游兵等を呼誘へて和殿を襲ひ撃まくと告るゝうち驚ぢて其の非義を鎮ん為に隊兵を率て来ゐけるに果して乱妨茲に及びて和殿痛痍を負ひ〻驚ぢ思ふ所に伍六素是遊俠ゆゑまぐ仕へざるを加へり見ぞ仇なるぬ人を〻も仇と〻怨て恣に守の游兵を従へて事殺伐に及びゝ罪反逆に等しかるべ。兵毎早く門戸を閉て健宗に従ひ来ゐる游兵等を逃さるゝ數珠繋ぎにして牽居よ〻〻と〻ひ〻も健宗の腕に衝立さる石見丸の中刀

を。ゆをつ拔合りつ。血を拭ふて主ゐ返せば石見次ハ开が儘轝ゐ斂る程ゐ。健宗ハ疼痛を忍びて身を起しつ、逃まくするを鬼太夫透さず掖捉へて袂ゐ志る捕縄もて両々纏ゆぞ結招りける。當下石見次好純ハ鬼太夫が公道ある。早速の計ひを欽び謝して且健宗が乱虐ある事の顛末箇様々々と詞急迫く報る折ふ。妻の長江ハ香華院より只今かゝり来ゐければ這禍事を聞知りて老僕腰下婢奴隷まで留守せ一両箇の婢妾等ハ。皆玄関ゐ走り出て。安否を問つ勅ゑ又彼奴隷可平ハ鬼太夫ゐ從ふて。既ゐ立かゝり。ゝ玄関ゐ登りて主を目成て居り。石見次ハ列列と那方這方を見かゝりて。ふる漫る。婢女毎長江も亦ふるつ見る。好純浅痍を負ふりて婦女子們ゐ扶抱せられ。ふるよる紀恥辱ある知らぎ。老僕等も志ぞかゝ。奴隷毎と共倍ゐ退りて奥と後門を守ること

緊要ある。疾々立ねと叱らる。婢妾們と共倍ゐ老僕奴隷も唯々とぞり。ゐ只得奥へぞ退りける。开が中ゐ長江のを良人ゐ向ひて嘶我夫其痍軽所ゐ。あらずとも。捨措ゐ難ゆ。しかるに。志の禍事を聞きしより。奴家先仙丹を。食せ。茲ゐ在り。是もて療治志の。壺をとり扶きび石見次頷沉て。开も當要のものゐを言ゐ紛れて忘れり。一口主鏡ゐ。ぞくとのひ。ぞも。顔を皺ゆ脚を伸して。穿る袴を褰れば安倍長江可平まで。ふゐ創めて其刺瘡を見つ冒根を顰たる。長江ハ痛まゝと思ふふるを鬼ゐ。して壺ある丹薬食せ。良人小斂せて裏股ある。痍ゐ布く者數回懐ゐ志りける。白麻の汗巾を探りもつ。両箇ゐ列裂て結合せて件の痍ゐ纏つ。楚と結留れば。今ゐ志ぢめる。薬の効功石見次ハ立地ゐ疼痛を覺ぞ。けん。袴の下を延つ。ゆをつ膝を折布けば。長江の歡びふるさて。鬼太夫

幾感歎して豫ねたる高嶋の仙丹奇效神妙なる哉主人起居ふ障りあ
く轎子ふうち乗て咱等と俱ふ御館へ参りて七鹿山の一條を蚤く訴へ
ぬぞへ恐く婦言行まて彼罪戾をいひ解ぬがさけ。いいぞもろて工ま
ぐ。曽根見宗玄健宗ハ密井の方の弟なるを敵ふ取てハ剛物なるべ。古
語ふ言ぞ。先ふそれぞ人を征し。後ふ時ハ征せらる。苦痛を忍びて生訴あ
らば手来曽根見ふ媚たりける小人々の胆を冷さえ這議甚麽と真實立
て。おろつこれぞ石見ハ怒ハ。ろつく莞爾とうち笑て。そを然あるべ。工るぐ。臣等今
朝出仕のを。曽様々々のゆありて守の御氣色宜かぐ。宿所ふ退りて
後の御沙汰を俟よと仰出されまぐ。他出を憚る折るふ縦非常の訴あり
とも。ろづぐ参らば倒ふ罪ふ為ぐ。とハを鬼太夫ゆあぐ。
其義ハ障りあるべぐ。這回和殿の訴ゆ。守の御疑ひ氷解して曽根見宗

玄健宗の奸虐早く知られぐ。和殿推参ぞあるこ。その御処ゆあるべ
ぐ。安倍同道仕らん准備を急ぐのひれと諭ぜば石見ハ再議ふ及ぐぞ。
ぞろぐ芳意ふ任んぞ。ろゆを長江ハ奥へ退りて我両刀と衣裳をそーれ。
衣脱更んと中刀を衝立て身を起たを鬼太夫急ふ推禁めて仙丹即
功ありとも目今運動ぞあるぐ異日平愈の障ふ。うんあゆを脱更ゆ
かーとハふ間ふ妻の長江ハ薬の壺を携て。そーく奥へ退りける程しもあ
らぞ腰下婢等ハ長江と俱ふ主の両刀夾衣麻の社祢廣蓋ふ載て玄関ふ
もて来る程ふ老僕ハ今日長江ぐ乗ぐ轎子の背門ふありぞを両箇の奴
隷ふ出させて。早せて玄関ふ立集ふ挑灯その他の東西までも。准備
脱落ぐりける既ふして腰下婢等ハ長江と俱ふ主を扶けて衣を被ぐ
ぞろる程ふ忽地外面ふ人ありて連りふ門を敲くゆぞ。老僕奴隷等訝

窓井の方
泣て
憂苦を訴ふ
たかより

まゝごなの方
めのとらふ
作者曰はく段四月上旬
うれしき婦人の衣裳を着
堤帯ろ
まさとり
宜しくくんこの面立の
筆小住あり

りて誰やと問へば其人答て否厭し給者ゆゑ多賀典膳政朝と名
告ゆ驚く好純安倍思ひがけぬ多賀主狩疾々内へ入れまゐらせよ。
とゆゆ老僕いろゐて外面ゆうち向ひて多賀大人ゆ稟付る主人屏居
の折るゆ一口主ゆ搦捕れる罪人等もひべ畧免とゆひつくも。角
門を颯と開けべ政朝いさもまそと応て躯找入る。前後ゆ従ふ伴當等が
照せ挑灯暗かるね道を守まる家臣ゆゆと都て聴きまる。高嶋の若
黨字六も。俱ぜらまてかり来つ。衆皆内ゆ入果まべ。老僕へ躯角門を閉
て背門の方ゆ退くつ。一口の伏兵毎へ健宗并ゆ游兵を一團ゆ牽居て
跪居て政朝を迎へけり。當下石見次鬼太夫へ遽しく席を譲りて夜陰
の来臨を労らべ政朝是を受わぜ否故意来ゆるゆあるぜ。目今出仕の
かへさゆて貴所の門前を過るゆより。悄地ゆ面談せまゐらくて驚らきま

ゐるゆ一口生も這處ゆて面會へ便宜ゆ然ども這里へ端近ゆれべ閑
談ゆ宜しかるぜ。とゆゆ石見次まゐろゐて忽地聲高ゆ奴婢等を召て。
客房ゆ燭台を出さしつ。卒とぞりゆ稍身を起して案内をまれべ政朝へ。
鬼太夫ゆ會釋して俱ゆ客房ゆ赴けべ。看茶の禮事果て政朝勝を找
めつ。石見次ゆ向ひてゆゆう。嚮ゆ西家僕字六をもて七鹿山の凶変を告
ぜまれしゆうち驚ゆて證人ゆれべ字六をも俱して速ゆ出仕のまり七鹿山よ
り逃かりる。游兵等の訴あり。そのゆゆ所大槩へ違へぜ。但長橋象舩の
自殺を他等へ知らざる而已是ゆより當番の有司ゆ先示談して臣等則
君侯ゆ見参を請まゐて件の事の趣旨を備ゆ上しかべ君侯うち驚
給ひて我昨日倭太郎美弥ゆ仰て彼杜四郎と栄六を射て捕れとて。悄
地ゆ路次ゆ出しつ遣りたる。その事へ錯つねども五郎平が隊兵を將て迹を

跟く追逼りて反て敗れを取りしとぞ。其義は思ひかけなき支と他等ぶ送ふ行ふ所孰を忠孰を不忠とぞ。はら分別ぞがたく絶へ他等三名その折ふ命を隕しなれがたの義甚疑と問ひしかば臣等答稟をぞう最憚りある言ぐら君は只曽根見宗玄の詭を信させひて彼大江杜四郎峯張栄六郎等を疑ひ敵の間者ぞと思食る故ふ有斯異変のいで来ぬ。

さてめ臣等も彼疑ひのあるふ流言耳ふ入りしかば臣主僕は朝倉家の間者ゆて當家の隙を窺ふとのふ流言耳ふ入りしかば臣等悄地ふ思ふぞう彼大江峯張は當初浪華ふ名も高き峯張九四藏の児孫ゆて高嶋石見守ふ由縁あるよゆ我目ぞ知る所とそ出處は錯ねども今は北地ふ相仕へて間者ふありたる欤その義はのまぐ知るべくぞ要ありそあれと尋思を考へその折腹心の者をもて悄地ふ浪華へ遣して彼来歴を捞らせ

ふ其者今日かゝり来て那里の便宜を告るぞう小可浪華ふ赴きて彼来歴を穿鑿ぞふ大江峯張両主僕を知る者少かるぞ彼小年等は七月の時候まで住吉の里近き孟林寺ふ寓居のるぞ八月ふ至りて武者修行の為俱ふ住吉を立去りて一雲時京師ふ旅宿を考へ近江の方ふ赴きしとのふ風聲這里へも聞えしとのふ。その言疑ふべくもあらざれば更ふ孟林寺を敲くふ及ばず則里の故老等ふ證書一通を写せぞ寵りふひ絶へて臣等ふ見せる者茲ふあり是御覧ぞよと懐より取出て呈閲ぞければ君侯列々爾考ぞ愀然として宜ふぞう我思浅くして宗玄の誣言を曉らぞ可惜忠義の倭太郎等弥を非命ふ殺ぞしかるゆゑ杜四郎栄六等我を怨てゆく御毎ふ不明不仁の君とて必人ふ説示ぞやせん恥しとぞりふ御嘆息の外なりぞを臣等慰め稟ぞう彼杜四郎栄六ぞ温潤

ふして学術あれば寡言謹慎の本性もて人の悪をふべくもふぞその爰に卿を心安るべしと諭し亶ぜば領ぜのひて去歳の九月彼少年ら我取らはる二種を他ゆへ受て實に受ざ當所を立去る今日ゆ及びて石見仆をもて返納し我非徳を猒へゆるんゆを曉らぞして云云と石見仆を詰りしに我ゆるゆ鈍きしかりゆと御後悔の色見えて又宣ふ今日ハ既ゆ黄昏に明日ハ風めて正廳ゆて訴人等を召集合て言の虚實を詮議せんそれより日猶急ぐべゆ今より彼七鹿山へ實検使を遣して宗玄以下の士嚴を反各其宅眷ふ執措せよ其の餘のゆゆ云云と仰示さるゆ折ゆ窓并の方の使仆ゆべ奥より一箇の女の童ゆ君侯の言遏へまゆりて何ゆ申ん咽ゆ言ゆ忘躯奥へ退りしとふゆの密話猶ゆ聞ければ日足より巻を更めて又下回ゆ鮮ゆん。

新局玉石童子訓 巻之十八終

村田